



輪郭のない共同体へ 可動壁による外部空間の領域構造の変化



志賀 和仁 (しが かずひと)
千葉大学 工学部 都市環境システム学科



地域という大きなスケールで衰退していくニュータウン。そんな郊外における家族をベースとした共同体の構成方法を疑い、家族を越えたつながりとして「街区」に着目し、街区のデザイン手法として「コモン」の研究を行った。研究から、コモンは外部に領域を形成するが経年変化での配慮が足りないこと、家族形態の変化に対応する住宅の必要性、住宅の出入りの可変性が求められることを見だし、外部空間の領域構造を変化させる可動壁を用いた経年変化に対応する住宅地を提案する。個人と個人が選択的に結びつくことのできる緩やかな関係性を帯びた「輪郭のない共同体」こそが、郊外におけるこれからの住宅地計画の在り方であると考えた。



講評

作者は、単身世帯数の増加、高齢化社会等の変容する住宅の住まい方の変化を敏感にとらえ、今後いかにして人が支え合い共に住まうかを考えている。

郊外の住宅に於ける共同体の構造を核家族の単位から個人の単位へと変換しつつ、人と人との柔軟な結びつきによる新たな共同体としての住まい方を示している。

この提案は、本来ある種の行為を規定してしまう壁を、可動壁としての大きな扉に置き換えることで、住人の思いや感覚がダイレクトに住空間を変化させ住空間の適度な距離感を生んでいくという秀逸な提案である。

扉を開けるといふ誰もが出来る単純な行為が、精神的、あるいは空間的に他者に開いていく、あるいは閉じることで、住空間を豊かにしていく様子は、身体感覚として非常にリアリティのある空間提案であり、好感がもてる作品であった。

扉の開け閉めで生まれる空間の変化が、外部空間のみならず、扉の可変による内部空間のあり方、あるいは建築そのもののあり方で踏み込んでの提案が見られると、さらによい作品となったのではないだろうか。

(審査委員：佐々木 達郎)